

## 脳卒中後の予防的抗菌薬投与は推奨されない

脳卒中後肺炎は、死亡の増大や機能的転帰の不良と関連している。本研究では、嚥下障害がある脳卒中後患者に対し、予防的抗菌薬を投与することが有効であるかを検討した。英国内 48 カ所の脳卒中ユニットの、18 歳以上の嚥下障害をもつ新規脳卒中を発症した患者 1,224 例を対象に、前向き非盲検クラスター無作為化比較試験を実施した。被験者は脳卒中発症後 48 時間以内にユニット単位で、7 日間の抗菌薬投与と通常ケアを行う群（抗菌薬群；24 カ所）、または通常ケアのみを行う群（対照群；24 カ所）にコンピューターにより無作為に割り付けられた。無作為化後 14 日までに 11 ユニットと患者 7 名が試験中止となり、解析には 37 ユニット 1,217 例が組み込まれた（抗菌薬群 615 例、対照群 602 例）。解析の結果、予防的抗菌薬投与は、脳卒中後肺炎の発症に影響を及ぼさなかった。脳卒中後肺炎の発症率は、抗菌群 13% に対し対照群 10% で補正後オッズ比は 1.01 ( $p=0.489$ ) であった。有害事象は、感染症とは無関係の脳卒中後肺炎（主に尿路感染症）の発症が最も多かったが、その頻度は抗菌群のほうが有意に低かった（4% 対 7%、 $p=0.02$ ）。

したがって、脳卒中ユニットにおいて嚥下障害がある脳卒中患者に予防的抗菌薬を投与しても肺炎の発症は抑制されず、予防的抗菌薬投与は推奨されないことが示唆された。

出典：Lancet. Published online Sep 3, 2015; pii: S0140-6736(15)00126-9